

「賀山豊彦のお宝発見」その3

新聞記事にみる賀山豊彦 (44)

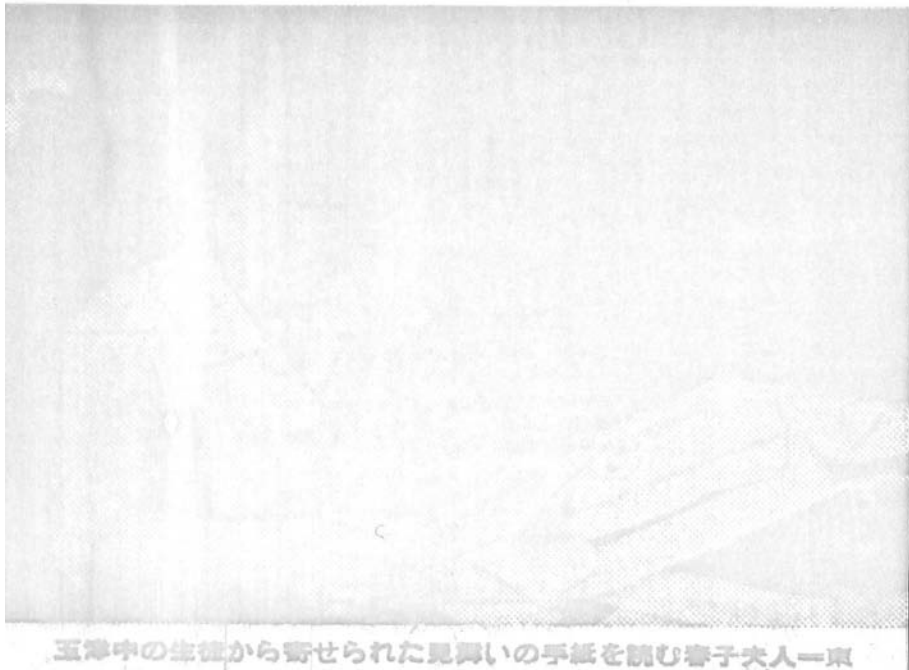
1910 (明治43) 年~1963 (昭和38) 年 (神戸版)

第44回 「賀川氏への神戸市玉津中学生の贈物」

「病床飾る楽焼の花びん」

1959 (昭和34) 年7月12日「神戸新聞」

病床飾る楽焼の花びん 賀川氏へ玉津中生が真心の贈物



玉津中学の生徒から寄せられた見舞いの手紙を読む春子夫人＝東京

暴力忘れました

先生も早く治って



賀川豊彦氏

賀川豊彦氏が贈った映写機がきっかけとなって、暴力教室は明るく静かな、学び舎にもどった。いま同氏は東京の病院に重病の身を横たえている。マクラもとには生徒たちが心をこめて作った染焼の花びんが置かれ、ひっそりと病状を見守っている。

神戸が生んだすぐれた社会事業家
賀川豊彦氏(70)―東京世田谷区上
北沢、松沢教会内―が神戸市教育
委員としてかねて心を痛めていた
のは重水区玉津中の問題だった。
同校は去年二月生徒が窓ガラスや

イスをたたき割るという事件を起
し、暴力教室日本版、だと騒がれ
た。「生徒たちの心を和やかに
するよい方法はなにか」と考
えた賀川さんは「学校としてな
にかほしいものがあつたらうって
ほしう」という手紙を同校に送っ
た。さうぞう同校で生徒たちのア
ンケートをとったところ、映写機
に多くの希望が集まった。四月末

賀川さんの心尽しの立派な映写機
が届いた。賀川さんのやさしい思
いやりが生徒たちの心を動かした
ものか、玉津中はこれがかつての
「暴力教室」かと思うほどの明朗
さをとり戻した。

賀川さんは三十一年十月、神戸
市の教育委員に就任してから、
月々の歳費をそっくり積立て、
「賀川基金」というものを設け
ている。玉津中以前にもこの基
金から真心のこもった贈り物を
受けた学校は市内で数校ある。
こうして賀川さんの善書そのま
まに、玉津中にも、「一粒の麦」
が育ち始めたのだ。

しかし、そのころから、すでに賀川
さんは病魔と闘う身だった。「一
月、西宮から徳島へ講演旅行にい
く途中、高松で倒れ、五月末から
は東京中野の中野組合病院に入院
している。病名は心筋こうそく、
持病のじん臓炎と肺炎を併発し、
高齢だけに一時は発作がひどく、
危がまれ、文字どおり「死線を越
えて」の闘病だった。幸い最近に
なつてやっと悲観的な状態からは
脱することができた。書病に当
っている善子夫人も「相成らず書病
はひどいですが、呼吸困難の発作
も少なくなり、味を感ぜたよう
です。精神力がいままで持ちこたえ

“暴力忘れました”

先生も早く治って

✿ 賀川豊彦氏が贈った映写機がきっかけとなって“暴力教室”は明るく静かな“学び舎”にもどった。いま同氏は東京の病院に重病の身を横たえている。マクラもとには生徒たちが心をこめて作った楽焼の花びんが置かれ、ひっそりと病状を見守っている。✿

神戸が生んだすぐれた社会事業家賀川豊彦氏（70）＝東京世田谷区上北沢、松沢教会内＝が神戸市教育委員としてかねて心を痛めていたのは垂水区玉津中の問題だった。同校は去年二月生徒が窓ガラスやイスをたたき割るという事件を起し“暴力教室日本版”だと騒がれた。「生徒たちの心を和やかにするよい方法はないものか」と考えた賀川さんは「学校としてなにかほしいものがあつたらいいほしい」という手紙を同校に送った。さっそく同校で生徒たちのアンケートをとったところ、映写機に多くの希望が集まった。四月末賀川さんの心尽くしの立派な映写機が届いた。賀川さんのやさしい思いやりが生徒たちの心を動かしたのか、玉津中はこれがかつての“暴力教室”かと思うほどの明朗さを取り戻した。

賀川さんは三十一年十月、神戸市の教育委員に就任してから、月々の歳費をそっくり積立て、“賀川基金”というものを設けている。玉津中以前にもこの基金から真心のこもった贈り物を受けた学校は市内で数校ある。こうして賀川さんの著書そのままに、玉津中にも“一粒の麦”が育ち始めたのだ。しかし、そのころから、すでに賀川さんは病魔と闘う身だった。一月、西宮から徳島へ講演旅行に行く途中、高松で倒れ、五月末からは東京中野の中野組合病院に入院している。病名は心筋こうそく、持病のじん臓炎と肺炎を併発し、高齢だけに一時は発作がひどく、危ぶまれ、文字どおり「死線を越えて」の闘病だった。幸い最近になってやっと悲観的な状態からは脱することができた。看病に当たっている春子夫人も「相変らず衰弱はひどいですが、呼吸困難の発作も少なくなり、峠を越せたようです。精神力でいままで持ちこたえてきたようなもので、お医者もびっくりしています」とほっとした表情。

賀川さん倒れるの報に、同氏が青年時代から心魂を注いで育ててきた神戸葺合区の新川アパートの人たち、三木岡山県知事、薄井尼崎市長らがかけつけたが、まだ面会謝絶の状態。玉津中の生徒たちもこの知らせにはびっくりした。「先生早くよくなって下さい」というみんなの気持ちが一つになり「映写機のお返しに賀川先生を慰めるものを贈ろう」という相談がはじめられ、学校で習った楽焼で花びんをつくって贈ることになった。高さ三十センチの灰色の美しい花びんは今月初め、生徒たちの見舞い状約五十通といっしょに賀川

さんのもとに届いた。

その日から、この花びんはずっとマクラもとで賀川さんの病状を見守っている。刺激的なものを避けねばならぬ病状をおもんばかりで、花が生けられている日、ない日がある。賀川さんは毎日花びんを見つめてはただニコニコしているという。同氏にとってこれ以上の“お見舞い”はないであろう。生徒たちの見舞い状を整理しながら、春子夫人は賀川さんからの伝言だとして「予想以上に早くよくなったのも生徒さんたちの真心のお陰でしょう。一生懸命療養して皆さんの希望に添うようにしたいと思っています。なによりも学校が明るく和やかになったことは喜ばしいことです」といていた。